

第40回電気通信普及財団賞 表彰者コメント ～テレコム人文学・社会科学学生賞～

<順不同>

※括弧内の所属は当論文賞受賞時のものです。

FU Mengyuan(フ ムエン) 氏

(早稲田大学政治経済学術院現代政治経済研究所 次席研究員(研究院講師))

テレコム人文学・社会科学学生賞 入賞

「Introducing an “invisible enemy”: A case study of knowledge construction regarding microplastics in Japanese Wikipedia」



この度は、拙稿を「第40回電気通信普及財団賞テレコム人文学・社会科学学生賞 入賞」にご選定いただき、誠にありがとうございます。電気通信普及財団の皆様、審査員の先生方に、心より御礼申し上げます。また、本論文の執筆および博士課程において、多大なるご指導を賜りました藤垣裕子先生、楊鯤昊先生に、深く感謝申し上げます

近年、新たな環境問題として注目されるマイクロプラスチック(MPs)に関する研究は急速に進展しています。科学研究の発展に伴い、社会科学の視点から、この「目に見えない」環境問題における効果的な科学コミュニケーションのあり方を模索することが求められています。

本研究では、2014年から2020年までの期間におけるMPsに関する日本語版Wikipedia記事の編集履歴を分析しました。その結果、主流の情報源と異なる言語環境下において、言語の壁やマスメディア情報への依存、Wikipediaのポリシーへの不徹底な適用などが、MPsに関する知識の不正確さや陳腐化を招く要因であることが明らかになりました。本論文では、非英語圏におけるWikipediaのような知識の共同生産による科学コミュニケーションの効果を向上させるために、個人および専門機関の積極的な関与の必要性を提言しています。

末筆ながら、貴団体のさらなるご発展とご繁栄をお祈り申し上げます。

第 40 回電気通信普及財団賞 表彰者コメント ～テレコム人文学・社会科学学生賞～

< 順不同 >

※括弧内の所属は当論文賞受賞時のものです。

山本 将也 氏

(筑波大学大学院人文社会ビジネス科学学術院ビジネス科学研究群経営学学位プログラム
博士後期課程)

テレコム人文学・社会科学学生賞 入賞

「Ambidextrous Product Development Management: Exploration and Exploitation in Iterative Innovation」

この度は、「第 40 回電気通信普及財団賞テレコム人文学・社会科学学生賞 入賞」を賜り、大変光栄に存じます。審査委員の先生方、財団関係者の皆様に心より感謝申し上げます。また、本論文の執筆にあたり、ご協力を賜りました皆様に、深く御礼申し上げます。

デジタルサービスの企画・開発現場では、サービスの改善や新機能の開発を続ける中で、長期的な成長につながる機能改善のあり方が常に問われます。特に、新たな価値を生み出す「探索」と、既存の強みを活かす「活用」のバランスをどのように取るべきかは、実務的にも大変重要なテーマです。そこで本研究では、サービスの継続的な改善である「Iterative Innovation」を「探索型」と「活用型」の 2 つに分類し、それらを組み合わせた両利きのイノベーション・マネジメントの有効性を検証しました。分析の結果、①活用型は成功率を高め、②探索型はサービスへのポジティブな影響が大きく、③試行回数を増やすと探索-活用のバランスが取れ、④探索-活用を並行運用することが重要であることが明らかになりました。

現代のビジネス環境では、単発のイノベーションだけでなく、それを継続的に実践する力が求められます。本研究が、企業が戦略的にイノベーションを推進し、変化の激しい市場に適応し、持続的な成長を遂げる一助となれば幸いです。

今回の受賞を励みに、理論と実務をつなぐ研究をさらに深め、より実践的な知見を提供できるよう努めてまいります。

第 40 回電気通信普及財団賞 表彰者コメント ～テレコム人文学・社会科学学生賞～

<順不同>

※括弧内の所属は当論文賞受賞時のものです。

黒川 真輝 氏

(最高裁判所司法研修所司法修習生(77 期))

テレコム人文学・社会科学学生賞 奨励賞

「身体を保護法益とする抽象的危険犯としての誹謗中傷等罪に関する試案」



この度は、「第 40 回電気通信普及財団賞テレコム人文学・社会科学学生賞 奨励賞」としてご選定いただき、大変光栄に存じます。電気通信普及財団の皆様ならびに審査員の先生方に御礼申し上げるとともに、本研究にご指導を賜った皆様にもこの場を借りて深く感謝申し上げます。

2020 年、リアリティー番組の出演者の方が SNS 上の誹謗中傷を苦に自殺する事件がありました。この事件をきっかけに、インターネット上の言論に危うさを感じた私は、表現の自由とのバランスを重視しつつも、そこにあるべき規律を探求したいと考え、メディア法の研究を始めました。本稿は、このような経緯で所属するに至った研究会の卒業論文として書き上げたものです。

本論文では、インターネット上の誹謗中傷に関する刑事的規制に関し、被害実態に即した犯罪類型の導入という観点から、2022 年に行われた侮辱罪(刑法 231 条)の法改正を批判的に検討した上で、身体を保護法益とする抽象的危険犯の新設について検討をしています。研究にあたっては、刑事立法論に留意をしながら、関連する判例や先行研究との整合性を特に心掛けました。

本稿を審査員の先生方に評価していただけたことを大変嬉しく思っております。この度の受賞を励みに、今後も研鑽を尽くして参ります。

最後になりますが、貴財団の益々のご発展とご繁栄を心よりお祈り申し上げます。

第40回電気通信普及財団賞 表彰者コメント ～テレコム人文学・社会科学学生賞～

<順不同>

※括弧内の所属は当論文賞受賞時のものです。

江口 修平 氏

(九州大学大学院経済学府経済システム専攻 博士課程1年)

テレコム人文学・社会科学学生賞 奨励賞

「携帯電話とインターネットの普及に関する実証研究

～イノベーション普及モデルを用いた加速期・成熟期の特定と普及要因の検証～」



この度は、財団創立40周年という記念すべき節目の年に、伝統と名誉ある「第40回電気通信普及財団賞テレコム人文学・社会科学学生賞 奨励賞」を賜り、大変光栄に存じます。審査委員の皆様ならびに電気通信普及財団の関係者の皆様方に心より御礼申し上げます。また、本研究に取り組むにあたり、多大なるご指導をいただいた九州大学の篠崎彰彦教授、藤井秀道教授、中石知晃講師、情報通信総合研究所の鷲尾哲主任研究員および学会や研究会等で貴重なご助言をいただいた全ての皆様に感謝申し上げます。

2000年代に入り、携帯電話に代表される情報通信技術（ICT）が新興国・途上国にまで爆発的に普及したことで、人々の稼得機会が拡大し、飛躍的な経済発展をもたらしています。そうした実態を背景に様々な先行研究がなされてきましたが、その多くはICTの普及が拡大・加速する局面に焦点を当てており、普及の伸びが落ち着き鈍化する成熟期に焦点を当てた研究は進んでいませんでした。こうした背景と問題意識を踏まえ、受賞論文では、1990年から2020年までの215カ国・地域を対象に、①様々なICTのグローバルな普及について長期データ観察による実態把握、②途上国での普及が特に進んでいる携帯電話とインターネットについて、普及の成熟期に達しているか否か、達しているとするならばいつ頃かの検証、③携帯電話とインターネットの普及要因の検証、の3点について実証分析を行いました。

今後は、受賞論文での成果を基に、ICTの普及がビッグプッシュとなり経済や社会の発展を実現させた国々が、成熟期に達した後もそれらを活用した持続的な発展を達成できているか、持続的な発展が可能になる条件、要因、そのメカニズムは何か、といった点を明らかにし、理論・実証の両面で本研究を深化させたいと思います。

末尾ながら、電気通信普及財団の益々のご発展を祈念いたします。